

## 1. 趣旨

従来の生成文法研究において、音韻部門は、心的辞書に蓄えられている音韻特性を文構造構築後に解釈する装置であると見做されてきた。また、音韻研究で用いられてきた諸階層構造は、形態・統語構造に依存するものと、言語ごとに定められた鋳型の構造を有するもの（音節・素性階層構造）のいずれかであるため、音韻部門には、統語部門のような回帰的併合を駆動力とする構造構築装置は存在しないと考えられてきた（Scheer 2004, Neeleman & van de Koot 2006）。

これに対し、非時系列音韻論では、（言語学的最小単位である）一值的音韻特性の併合により、形態素内の音韻構造が構築（語彙化）されると仮定され、音韻部門においても回帰的併合を駆動力とする構造構築装置が存在すると考えられている。本ワークショップでは、このモデルの妥当性を、各講師が、回帰的併合、強勢、局所性、語根レベル現象、一值的音韻素性による構造構築についての研究を、線形順序を排した表示モデルを用いて発表し、参加者との全体討議を行うことで探る\*。

## 2. 構成（全体 120 分）

趣旨説明（5 分）

各講師による発表と質疑応答（25 分 × 4 発表 = 100 分）

参加者とのディスカッション（15 分）

## 3. 各発表の題目と要旨（発表順）

## 1. 回帰的併合と強勢 時崎 久夫

句と複合語の強勢は、核強勢規則（NSR）と複合語強勢規則（CSR）によって説明されてきたが、Cinque (1993) は、この2つの規則を一般化し、Xバー構造で最も深い位置に埋め込まれた要素に強勢を付与する規則を提案した。本発表では、この規則を現在のミニマリストの枠組みで再定義し、併合を受けた集合に端末要素を併合する際には、集合に強（S）を付与するという規則を提案する。

また、句強勢・複合語強勢が構造によって決定されるのに対し、語強勢は、語末第2音節など、語の中の線的な位置によって、指定されることが多かった。この発表では、重音節への強勢付与を手がかりに、音節構造が文節音さらには音韻特性の回帰的併合によって作られると考えることにより、句強勢・複合語強勢と同じ仕組みで語強勢が決定されるという可能性を論じる。これが成り立てば、強勢は、句から語に至るまで、すべて同一の規則によって与えられるという一般化が得られる。

## 2. 非時系列的音韻論における局所性と方向性 高橋 豊美

この発表では、非時系列音韻論の枠組で展開される制約的な音韻表示理論を論じる。一般に音韻表示理論では、音韻構造の単一または複数のレベルにおいて、時系列をなす構成素を音韻表示にふくめてきた。そのような構成素の存在は、音韻表示の適格性に関する局所性や方向性などの制約を

\* 本研究は JSPS 科研費 26284067 の助成を受けたものである。

規定するうえで不可欠なものであった。非時系列音韻論の枠組では、音韻構造はすべて非対称的關係である依存 (dependency) により構築されるが、この依存そのものが構成素のあいだの時間的な前後関係を決定することはなく、発話音声の時系列は、音声解釈 (音韻表示を音響信号にマッピングする装置) により生じると考えられている。ここで問題になるのは、局所性や方向性という概念で説明されてきた一般化の取扱いであろう。このセッションでは、非時系列的音韻論の枠組においても同様の一般化が可能なことを示すだけでなく、この枠組においてより制約性の高い音韻表示理論が展開できることを主張する。

### 3. 線形順序を排した英語軟口蓋音軟化の分析 大沼 仁美

本発表では非時系列音韻論の枠組みを用いて英語の軟口蓋音軟化の過程を考察し、当該理論の妥当性を探る。英語の軟口蓋音軟化の多くは、語基の終端に位置する軟口蓋閉鎖音 /k, g/ が、前舌母音で始まる接尾辞によって後続される場合に観察され、/k/ は /s, ʃ/ と、/g/ は /dʒ/ と交替する。この過程は従来、交替の対象となる子音と母音の前後関係に依存した同化現象として分析されてきたが、何故 /k/ は /ʃ/ と、/g/ は /z, ʒ/ と交替しないのかについての明示的説明は与えられてこなかった。これに対し本発表では、非時系列音韻論では、/k, g/ が /s, ʃ/ や /dʒ/ と交替し、/ʃ/ や /z, ʒ/ とは交替しないという事実は、線形情報に言及することなく、音韻的最小単位であるエレメントが形成する階層構造上の位置に言及することで説明される。具体的には、軟口蓋音軟化は、構造構築上および外在化上主要な役割を果たしている位置に挟まれた部分を対象とする同化現象であるとみなす。

### 4. 一值的音韻素性を対象とした回帰的併合 那須川 訓也

従来の研究において、音韻部門はレキシコンに蓄えられている音韻特性を文構造構築後に解釈する部門であると仮定されてきた。そうした場合、音韻研究で取り上げられてきた回帰的構造は、形態・統語構造に依存したもので、音韻部門で構築する回帰構造は存在しないと考えられてきた (Scheer 2011)。統語演算が関与しない形態素内の音節・分節内表示においても、階層構造の存在は認めるものの、いずれの表示理論においても言語毎に定められた鋳型的構造が仮定されており、回帰的併合により構築される構造は存在しないと見做されてきた (Pinker & Jackendoff 2005, Neeleman & van de Koot 2006, Samuels 2009)。

これに対し、本研究では、一形態素の音韻表示を構築 (語彙化) する際、一值的音韻素性を対象とする回帰的併合が働いていると仮定する。さらに本研究では、極小論に立脚した構造を音韻表示に拡張し、素性節点、韻律点、オンセット、核、ライム、音節、フットなどの音韻範疇を廃し、一值的音韻素性の回帰的併合のみで音韻構造を構築するモデルの構築を試みる。

### 参考文献

- Cinque, Guglielmo (1993). A null theory of phrase and compound stress. *Linguistic Inquiry* 24: 239–297.
- Neeleman, Ad & J. van de Koot (2006). On syntactic and phonological representations. *Lingua* 116: 1524–1552.
- Pinker, S. and R. Jackendoff (2005) “The faculty of language: What’s special about it?” *Cognition* 95, 201–236.
- Samuels, Bridget (2009). The third factor in phonology. *Biolinguistics* 3.2: 355–382.
- Scheer, Tobias (2004). A lateral theory of phonology: What is CVCV and why should it be? Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Scheer, Tobias (2011). *A guide to morphosyntax-phonology interface theories: How extra-phonological information is treated in phonology since Trubetzkoy’s Grenzsignale*. Berlin: Mouton de Gruyter.